

遷移する「革命」概念の超克*

—ムワーティン革命の背景考察のためのプログラミング—

板垣雄三（東京大学名誉教授）

〔要約〕

本稿は、2011年中東から世界化し／2016年以降は韓国のキャンドル革命として現象した／新しい市民革命—筆者はこれを「ムワーティン革命」と呼ぶ—の「人類史的画期性」を明らかにする作業をプログラム化するための着手的ステップとして提出するものである。

まず（2）玩弄される革命概念の諸相で、現在の「革命」概念の混乱状況を俯瞰する。ここでは、民主主義・法・正義が勝利し「革命の時代」は終わったという意識ないし次は「文明衝突の時代」だとする予測から、（a）「反テロ戦争」操作したがって人工革命としてのレジーム・チェンジを予定する政治学的思考／（b）法と暴力への依存からの脱却や「生」の根源的諸局面の変革への着目から靈性に開眼するポストモダン思考／（c）色や標識で命名する革命群量産の「自由化」宣伝／を概観し、これらを「旧市民革命時代の終末現象」として観察することができる。日本の安倍首相が喧伝する「生産性革命」や「人づくり革命」に至っては、言葉の綾にすぎない。

ついで（3）では、17世紀以降の「旧市民革命が現在まさに変革の必然性に曝されている諸問題を産み出した元凶」である証拠を列挙した上で、さらに「20世紀の社会主義諸革命も旧市民革命の大きな枠組の中に組み込んで批判的に眺める視角」を提案する。キャンドル革命は、上掲の標識つき革命に組み込まれてはならず、また南北が統一に向かう過程において20世紀社会主義批判という課題が不可避的にあり、その考究が迫られるとする。

そこで、（4）では、イラン世界と中国という二つの伝統的「帝国」編成型国家での永続革命の姿を、欧米中心主義史観から解放して見直し、「多元性・多様性を活かす普遍主義的な世界ネットワーク政治体 polity に向かう構想」へと脱構築する道筋を見つけ出すヒントを探索する。

現実の打開が夥しい迷路・隘路に阻まれているのは確かだが、ムワーティン革命がジェンダーや将来世代を初め突破口の万般において「超近代」を蘇生させる必然性に、結語は注目する。

キーワード：ムワーティン革命、超近代、旧市民革命、20世紀社会主義、歴史の終わり、色つき徴表つき革命の濫造、永続革命、民衆宗教、混一、「帝国」の脱構築

【目次構成】

- 1] はじめに
- 2] 玩弄される「革命」概念——懐疑・消去／高等批評／濫造・濫用・歪曲／
 - a) 欧州近代の嫌「革命」の伝統的反「革命」思想とは異質の楽観的「革命」否認
 - b) マルクス主義に取って代わるポストモダン／ポスト構造主義／
 - c) 色つき・徴表つき「革命」群の横行
- 3] 旧市民革命が突破できなかった虚妄・逸脱・偏向・限界
 - a) 17世紀～19世紀の「ブルジョワ [民主主義] 革命」
 - b) 20世紀の「社会主義革命」・「人民民主主義革命」と分類されたケース
- 4] 永続革命をどのように見るか
 - a) イランの永続革命
 - b) 中国の永続革命
- 5] 結語

1] はじめに

動機：本稿は、欧米中心の世界秩序が崩壊していくだけでなく／人類社会の自壊・共滅が忍び寄る／危機に直面しているという現実認識のもとで、混迷・閉塞状態を打破し転換し刷新する画期としての〈ムワーティン革命〉＝新*^{ムワーティン}市民革命の必然性を、世界史的に位置づけ意義づけようとする企ての一ステップである。直接には、^{Paik Nakcheon}白樂晴「“キャンドル”の新社会づくりと南北関係」（『世界』2017/5, pp. 219-229）に注目しつつ、大韓民国において「キャンドル革命」とも呼ばれるにいたった事象を、〈ムワーティン革命〉¹（筆者は、西暦7世紀以後に世界各地で伏流化させられていた^{スーパーモダニティ}超近代性が回復・活性化される動きとして、2011年スタートを切ったと主張してきた）の初発過程に屹立する一里塚であると、認識することができるのではないか、問うことにしたい。

作業スタイル：本稿では、〈ムワーティン革命〉を人類史・世界史・宇宙史の中で考えてみ

る上で、〈ムワーティン革命〉の近接の予兆が観察されはじめる 20 世紀末以降とりわけ顕著となった「革命」概念の操作的遷移と関係させつつ、検討・考察するプログラムの設計のため、まず構想の骨組み^{スケルトン}を提示してみることに重点を置くこととする。このため、着目する個々の事象の記述や解明に深入りことは、特に必要な場合を除き、省略する。

2] 玩弄される「革命」概念——懷疑・消去／高等批評／濫造・濫用・歪曲／

a) 欧州近代の嫌「革命」の伝統的反「革命」思想²とは異質の楽観的「革命」否定

- ◆ Francis Fukuyama, *The End of History and the Last Man*, 1992. フランシス・フクヤマ『歴史の終わり』、1992. ソ連崩壊とリベラル民主主義のソフト力の弁証法的勝利、歴史（＝戦争・革命）の終わり＝最終段階を生き続ける人間、ヘーゲル（コジエーヴ解釈）・マルクス・ニーチェの変造剽窃。
- ◆ John Rawls, *The Law of Peoples*, 1999. ジョン・ロールズ『万民の法』、2006. 道理を弁えたりベラルな国の民衆 reasonable liberal peoples と良識的な国の民衆 decent peoples の民主制社会と無法国家 outlaw state／不利な条件の重荷を負う社会 societies burdened by unfavorable conditions／仁愛的絶対主義 benevolent absolutism／（フクヤマ流に言えば「歴史が終わっていない社会」）とを対置し、前者に法と正義を予定。前者内部では戦争はあり得ず、戦争は前者の対後者懲罰。先立つ *A Theory of Justice*, 1971. 『正義論』2010. などの仕事では、自由原理・機会原理が侵されたとき政治の共通観念に訴える非暴力の少数者による市民的不服従のみ、自制された条件下で認められる。
- ◆ Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, 1996. サミュエル・ハンティントン『文明の衝突』、1998. [原型は Foreign Affairs 誌 1993 年夏号に掲載され、評判を呼んだ。] 国際政治における文化やアイデンティティの問題性の比重が増し文明間衝突と局面が 21 世紀の中心テーマとなるとし、西欧文明に対するイスラーム文明および中華文明の挑戦に注目して、各文明単位での「革命」がある種の盲点となる。ここから「反テロ戦争」の設計がはじまる。

b) マルクス主義に取って代わるポストモダン／ポスト構造主義／

- ◆ Jean-François Lyotard, *La condition postmoderne: rapport sur le savoir*, 1979. ジ

ャンフランソワ・リオタール『ポストモダンの条件』、1986。同 *Dérive à partir de Marx et de Freud*, 1973。[1994年に新版] 『漂流の思想：マルクスとフロイトからの漂流』、1987。「5月革命」(1968年)の体験。大きな物語の終焉 fin des “grands récits narratifs.”

- ◆ Jacques Derrida, *Force de loi*, 1994。ジャック・デリダ『法の力』、1999。でデリダによる批判が広く論議を巻き起こした Walter Benjamin, *Zur Kritik der Gewalt*, 1921。ヴァルター・ベンヤミン「暴力批判論」、1969 [岩波文庫 1994]における宗教性を帯びた概念＝「神的暴力」göttliche Gewalt とは何か。その顕現が、神話的な「法」の呪縛の堂々巡りである国家権力を廃し、暴力に依存する法も法に依存する暴力も廃止してしまう「革命」の幻。「ドイツ革命」(1918年)に託された夢が、20世紀末に吟味される。
- ◆ 環境生態系保全／地球・宇宙汚染／農業・遊牧など生業／水資源／食品／種子／動物愛護／災害(自然・核・疫病)／戦乱／難民／差別・ヘイト防遏／性的少数者／女性／子ども／ジェンダー／リテラシー／医療支援／カウンセリング／教育支援／緊急生活物資支援／ライフライン復旧／社会再建／等々、多様な課題に関わる草の根の市民有志の社会活動が、個々人のあり方・大小の地域から世界のあり方に及ぶ意識的・無意識的変革と関係する意味をもつとき、活動主体の^{スピリチュアリティ}霊性の働きが注目されるようになってきた。万物に宿るアニマへの感覚などが、人間・自然・宇宙のあり方を反省させ、その変わり方＝「革命」観を変化させる。メシアニズムの観点からの「革命」研究にも、多様な可能性が期待できるのである。

c) 色つき・徴表つき「革命」群の横行

- ◆ これについては、そのリストアップと記述、分類、論評例示、関係文献表が提示されている。https://en.wikipedia.org/wiki/Colour_revolution³

これによると、

カーネーション革命(ポルトガル、1974/4)／^{きいろ}黄色革命(フィリピン、1986/2)／ココナツ革命(パプアニューギニア、1988/12～98/4)／ビロード革命(チェコスロヴァキア、1989/11～12)／ブルドーザー革命(ユーゴスラヴィア、2000/10)／バラ革命(ジョージア、2003/11)／オレンジ革命(ウクライナ、2004/11～05/1)／^{むらさき}紫色革命(イラク、2005/1)／チューリップ革命(キルギスタン、2005/2～4)／^{シ-}杉革命

(レバノン、2005/2～4) / ブルー革命 (クウェート、2005/3) / ジーンズ [またはデニム] 革命 (ベラルーシ、2006/3) / サフラン革命 (ミャンマー、2007/8～9) / ブドウ革命 (モルドヴァ、2009/4) / 緑色革命 (イラン、2009/6～10/2) / ジャスミン革命 (チュニジア、2010・12～11/1) / ^{ロータス}蓮革命 (エジプト、2011/1～2) / ^{パール}真珠革命 (バハレーン、2011/2～14/11) / コーヒー革命 (イエメン、2011/1～11) / ^{ジャスミン}茉莉花革命 (中国、2011/2～3) / グアテマラの春革命 (グアテマラ、2015/4～9) / ^{カラフル}色とりどり革命 (マケドニア、2016/4～7) / ビロード革命 (アルメニア、2018/3～5)。

このリストの作成者は、こうした命名の傾向を強めたものとして、東欧でのコミュニスト政権ないし承継政権に反発する学生運動に注目し、世界的にも、全般的に非暴力の市民大衆による権威主義的政権の退陣要求ないし選挙不正抗議などの拡がりに着目して、街頭行動における色揃え・服装その他の徴表とネイミングとの関係を説明する。しかし、「革命」の性格・役割・意義の面でリスト上の各「革命」間の相違や対立には拘泥せず、さらに2011年中国でのネット書き込みの多発動向まで加えている。しかも、運動主体の自称選択よりも、欧米メディアの恣意的イメージ操作のキャッチフレーズや／外国政権内部でこれらの運動を煽動・操作して利用しようと策謀するコードネーム的な名付け／が、断然多いのであり、それらが無造作に雑然と並列されている。

◆ このような混乱は、以下のごとき視点を看過するところから発しているのだ。

(i) 帝国主義的な欺瞞政策 (第一次世界大戦後、エジプト王国「独立」を認める新植民地主義の先取りをはじめ) において、「革命」概念もまた利用された。イラン・イスラーム革命で打倒されたパフラヴィー朝のモハンマド・レザー・シャー (在位 1941～80) が1962年からタテマエ上は79年まで主導実行した「白色革命」*Engelâb-e sefid* (土地改革・森林地国有化・国営工場払下げ・女性参政権など、地主制解体＝国王権力強化政策) の「革命」僭称。

(ii) 21世紀の開幕とともに、9.11事件を境に、「民主化」の名による^{レジームチェンジ}体制変革すなわち外部からの政治的・経済的・軍事的干渉・介入による「革命」誘導が、在来の秘密情報機関による隠然たる政府転覆活動に代わって公然と行なわれるようになった。むしろ、秘密情報機関の活動は、そのような公然たる干渉のきっかけとなる「テロ」事件を演出することに主眼がおかれるに到った。〈「反テロ戦争」時代〉なるもののデザイナーと実行者との分業に、^{ディープステイト}深層国家の構造が映し出される。今世紀に「色つき・徴表つき革命」が連続と出

現する理由が理解されよう。そこでは、出し抜き裏をかく多様な「革命企画」が個別に運営される時代のように見せて、全体構造が緊密に結び合っている。基軸をなす 9.11 事件の真実がむりやり隠されるのは、そのためと推理される。これは、イラク・イラン戦争期のイラン・コントラ事件（米国レーガン政権が、国交断絶中のイランに秘密裡に武器を輸出、その代金を中米ニカラグアのサンディニスタ左翼政権と戦う右翼ゲリラ=コントラの援助に回していたスキャンダルが、イランともコントラとも裏取引していたイスラエルの仲介という背景もろとも、1986 年に発覚）から学習した結果の、止め処なき悪への転落であると言わなければならないだろう。イスラーム革命もまた、その矜持を汚した。

(iii) 上に紹介した「多彩革命」群リストでは、「冷戦」期からソ連崩壊そして「東」のその後を展望しようという潜在的な問題意識が看取される。現在のロシアや中国の指導者の反応姿勢に対する関心も、その表れだろう。じつはリストの外側、1956 年「ハンガリー動乱」／1968 年「プラハの春」／1980 年・89 年「ポーランド自主管理労組（ソリダルノスチ「連帯」）」／に連なる「自由・民主」希求の潮流の内に、多少のバラツキ・散らばりはあれ、これら「革命」群を一括収容したいのではないか。過去に脚を引っ張られ、(ii) の現状に見合う視野において、重大な欠落が生じてしまったのである。それは、2014 年における台湾の太陽花学〔生〕運〔動〕や香港の雨遮（雨傘）革命、そして何よりも 2016～17 年の韓国キャンドル革命に対するまなざしが抜け落ちてしまったことで、馬脚露見が決定的となった。だが、ここまでこの色つき・徴表つき「革命」群リストについて検討してきたことからすれば、キャンドル革命がこのリスト上で安直に「正当な位置」を求めるべきかは、キャンドル革命を 17～18 世紀の英国・米国・フランスにおける「市民革命」に比肩するとするような論調とともに、著しい見当はずれだと言わなければならない。

3] 旧市民革命が突破できなかった虚妄・逸脱・偏向・限界

a) 17 世紀～19 世紀の「ブルジョワ〔民主主義〕革命」

イスラーム文明のネットワークに触発されてその超近代性に適応しつつも、そこで病変をきたした「ヨーロッパ的 Modernity」なるものの有害な問題性が、欧米の諸「革命」によって、克服されかと思えて、逆に尖鋭化されるようになった。⁴

ここで着目されるのは、

- ◆ 近代的-私的土地所有権 主権国家 世界分割・再分割 先占 植民地支配 勢力圏

- ◆ 産業資本主義 大量生産型・モノカルチャー型 資源・市場支配 交通・通信網
- ◆ 法人 ビューロクラシー 金融技術 マネー経済 大量殺人破壊兵器 仮想現実
- ◆ 収奪的自然利用 環境破壊 エネルギー循環・情報循環の攪乱 世論操作 生命操作
- ◆ 政教分離＝世俗主義 宗教紛争煽動 文化多様性への適応力低下 倫理的退廃
- ◆ ナショナリズム 軍事化 強権化 ^{マイノリティ} 少数民族差別 人種主義 ジェンダー差別
- ◆ 民主主義 タテマエ化・擬似化・空洞化 欧米化の優越的価値独占 戦争の理由
- ◆ 国際社会・国際法秩序 勝利者主導の国際取り決め・国際機関 不公正な二重規準
- ◆ 国際経済 企業活動の世界化 教育・医療を含め不均等社会発展 南北格差
- ◆ 世界規準 時間・度量衡・学術など万般の欧米中心主義 適応度競争の国際政治

以上、いずれの項目も、すべてが 戦争 に繋がっている点に、注意が肝要だ。

あらゆる 社会契約の出発点 が架空の「自然状態」や「原初状態」^{State of Nature Original Position} についての思考実験を基礎に構想され、宗教的に多様なマディーナ市民の契約文書（622年）⁵ に原型をもつ社会契約による平和システムの歴史が抹消される。17世紀のトマス・ホッブズの場合は、「万人の万人に対する闘争」が自然状態だとされた。20世紀のジョン・ロールズは、先述したように、「万民の法」を担うのは道理を弁えりべラルで良識の民主的社会だけで、これを脅かす無法国家に対しては寛容であってはならず、戦争しかないのが世界の現実だ、と言うのだった。

b) 20世紀の「社会主義革命」・「人民民主主義革命」と分類されたケース

それらの帰趨についての研究は、それぞれ国家別に深淺・濃淡さまざまだが、いずれの場合もまだ緒についたばかりと言うべき段階で、総体的視野での理論化に至っていない。しかし、多くの場合、民族解放[独立]革命(=「国民国家」形成)というカテゴリーとも重複する上に、それぞれのケースの21世紀的結末の現状からすれば、17世紀から20世紀までを貫通する視界において、「旧市民革命」の枠組を拡げて新しい理論構築を試みる機が熟しつつあるのではないか。21世紀のムワーティン革命の画期性の研究は、この試みを必然的なものとしていくであろう。

さしあたり、東欧・朝鮮・ヴェトナム・キューバをはじめ、モンゴル・中央アジア・インド・中東・アフリカ・ラテンアメリカをめぐるは、各地域での経験を「n地域」論的に⁶ 総合するようなトランス地域研究の共同討論が組織されることが望ましい。

ロシア研究では、スターリン主義と脱スターリン体制の諸階梯／そしてプロレタリア革

命論の末路／への、中国研究では、抗日戦争の意味づけ／文化大革命期の究明／改革開放後の諸階梯／への、上記新視角からの検討が組織化されることを望みたい。

4] 永続革命をどのように見るか

^{パーマネント}永続革命論は、ロシア革命をめぐるトロツキーが提起した見通し（プロレタリアートが権力を握り、ブルジョワ革命からプロレタリア革命までの任務を連続して担わなければならないが、農民が圧倒的比重を占めるロシア社会の変革は、西欧さらに世界への革命拡大の過程のもとでのみ保障されるとした）と一般に理解されている。しかしここでは、それとは異次元で、また 1880 年代以降 継起してきたエジプトの諸革命^{キウワ}（オラービー革命、1919 年革命、1952 年革命、2011 年革命）や 20 世紀前半をつうじて展開したメキシコ革命（革命を牽引する指導者がマデーロから、カランサ、オブレゴンを経てカルデナスまで交替）への視点などとも異なる視界で、イラン世界と中国とを永続革命の局面として検討する。いずれも、アジア東西の「帝国」的編成と関係する。

a) イランの永続革命

多民族国家イランは、シリア内戦の国際化とともにレバノンから湾岸に拡がるその影響力を俄然飛躍的に強化しただけでなく、アフガニスタン・タジキスタンはもちろん、インド亜大陸も歴史的にはイラン文明の圏域であり、上海協力機構（上合組織、ШОС）では中・露からその正式加盟を希求される立場である。古代帝国がエジプト・北アフリカからソグデリアナにかけての広域を統治して文化的影響を東アジアの涯^{はて}まで及ぼし、ゾロアスター教・仏教・ユダヤ教が産出されたのはイラン世界だとも見られるが、これらにキリスト教・イスラームを加えた綾織の上にシーア諸派のコミュニティ群が展開し、さらに 1970 年代末イスラーム革命以降は「革命」を忌避して米国や欧州への移住という拡散までも加わって、現在のイラン文明の圏域が形成されている。

イラン社会で持続する^{エンゲラフ}革命の永続性を、現時点を規定するイスラーム革命からその前史を遡る形で振り返ってみよう。⁷

- ◆ イラン・イスラーム革命 1978~79 パフラヴィー朝が打倒され、イスラーム共和制成立。1963 年テヘランやゴム（コム）でアーシューラー集会（白色革命批判）とホメイニー国外追放からの時期が、直接の前史。この「白色革命」期、イスラエルとの

提携強化。

- ◆ モサッデグ率いる国民戦線政府の石油国有化、CIA／軍事クーデタが潰す。1949～53。
- ◆ クルディスタン共和国の独立（クルド民主党、マハーバードで）と瓦解。1946 初～末。
- ◆ アゼルバイジャン国民政府の樹立と壊滅（タブリーズで）。1945 末～46 末。
- ◆ ジャンギヤリー運動（ギーラーン革命）1920 ラシュトでギーラーン社会主義共和国樹立（バクーでソビエト政権誕生／タブリーズでアゼルバイジャン民主党のアーザーディスタン建国宣言／に引続き）、21 テヘランで英国が支援するレザー・ハーンのクーデタ＋イラン・ソビエト友好条約により、ギーラーン革命は見捨てられ、ロシア革命の限界線が決まるとともに、パフラヴィー朝国家の出現。1915～21。
- ◆ イラン立憲革命 対外従属を深めるガージャール朝に対し、専制に反対するウラマー（イスラーム法学者たち）・バーザール商人・市民らの抗議・議会開設要求が全国に拡大、やむなく国王は議会を開き改革を進め 1906 年憲法を制定したが、07 年イランを南北に勢力範囲分けする英露協商に基きロシア軍が介入を繰り返すことにより、革命は挫折し憲法は有名無実化した。1905～1911。
- ◆ タバコ・ボイコット運動 1890 年ガージャール朝国王が英国人投機家にタバコの製造・販売・輸出の利権を安く譲渡、ムジュタヒド（イスラーム法の最高権威）がタバコ喫煙禁止の法判断、反シャー運動が国を覆う。1891～92（96 シャー暗殺事件）。
- ◆ バーブ教の出現とバーブ教徒の反乱
1844 年バーブ（シーア派の隠れイマーム [マフディイ] への門）を自称した指導者を中心に成立・拡大したが、イスラーム離脱宣言により、ガージャール朝から弾圧され、50 年バーブ刑死、52 年反乱鎮圧。1844～52（オスマン帝国に逃亡した教団からバハーイー教成立）。
- ◆ サファヴィー朝の成立と発展
元はスンナ派の神秘主義教団だったサファヴィー教団とトルコ系遊牧民戦闘集団のキジルバシュとの重なり合いを土台とする国家形成の初期拠点はアゼルバイジャンのタブリーズ。それが、シーア派中の 12 イマーム派を統合軸とする国家成型過程で、ガズヴィーンついでエスファハーンに都を置くイラン国民国家を実現し、多様性を内包するイラン世界の中心部分となる変成を遂げるのは、それ自体「革命」的だ。そ

の前提として、この地域がモンゴル帝国に組み込まれイル・ハーン朝が成立して、第7代君主ガザン・ハーン（チンギス・カンの来孫 [5代目の子孫]）がシャーマニズムと仏教からイスラームに改宗し（1295年、ムスリム名マフムード）多宗教共生の体制を保障したのは、中央アジアから黒海周辺までの「共存のイスラーム世界化」が決定的となった背景は無視できない。サファヴィー朝 1501～1736（サファヴィー教団成立は13世紀末）。イル・ハーン朝 1258～1353（ガザン・ハーン 在位 1295～1304）。

◆ 未完成に終わったアッバース朝革命

預言者ムハンマド没後のカリフ4代はウンマ（イスラーム共同体）の選挙によったが、その後はウマイヤ家の世襲王朝と化した。ウンマの統治者は「家の人々」^{アフル・アルバイト}（預言者ムハンマドの子孫）であるべきだとする地下の革命運動がイラン高原北東部ホラーサーン地方に革命宣伝者として送り込んだ将軍アブー・ムスリムはイラン人信者の組織化に成功、革命軍はダマスカスに向け西進しウマイヤ朝を倒すが、勝利の果実を握ったのは「家の人々」としては外戚のアッバース家で、アブー・ムスリムは謀殺され、新しい王朝への抵抗は続く。アッバース朝 750～1258（アラブ対アジャムの対立感情や、イラン系の文化的優越を誇るシュウービーヤ運動も、起きた）。

◆ 遡行が行き着く、ダリウス1世（ダーラヤウシュ）の登位

紀元前6世紀アカイメネス（ハカーマニシュ）朝のペルシア帝国で、ダリウスは王統では傍系の人物で、篡奪者として（正確には、篡奪者に対する革命をつうじて）王となったと見られる。彼は6人の仲間と7人組で帝国の危機を救う権力奪取に踏み切った。仲間は民主制・君主制・寡頭制を念頭に政体選択を議し、民主制は分裂を／寡頭制は僭主／を生むので、資格ある王の統治を選ぶこととしたところ、詭計が功を奏したダリウスが王となる。巨大帝国の帝王は「革命」を原点とし、^{フリムス・インテル・ペーレス}同等者中の第一人者として多様な政治的可能性を包摂していた。ベヒストゥン碑文やヘロドトス『歴史』の記述が、これを示唆し、プラトン最晩年の対話篇『ノモイ（法律）』第3書（国制）もこの物語に関係している。⁸ ダリウス大王 在位 紀元前 522～486。

b) 中国の永続革命

これに関連しては、当然、無数の問題が浮上する。「易姓革命」という王朝単位の正統性イデオロギーが「革命」の正当化と表裏一体であることの意味／「禪譲」・「放伐」という二

分法の問題性／などをはじめ、中国の伝統的な「革命」観念をめぐる議論は措くとして、ここでは検討しておきたい問題を二つに絞ることとする。すなわち、i)「革命」を持続する民衆／ii)中国社会という歴史の場で「革命」を展開させてきた民族群／だ。

i) 歴史をつうじて底辺の民衆を反乱へと突き動かしてきた宗教結社・秘密結社・会党の役割・ネットワーク機能の伝統を通時的に明らかにすること。⁹

後漢末：黄巾の乱を起こす太平道／天師道とも呼ばれた五斗米道／ともに道教に発展。

唐末：塩密売の全国組織と関係ある黄巢の乱。

元末：紅巾の乱の担い手は、弥勒下生信仰を受容／に適応／した白蓮教や明教の集団。

明末：寧夏銀川の馱卒、李自成の乱における農民起義の強みと弱み 40日天下の順朝。

清朝下：太平天国を推進した拝上帝会、天朝田畝制度の訴え 抵抗連帯繋ぐもの。

清末：紅槍会、興中会、哥老会、天地会、三合会、大刀会、小刀会、...

20世紀：国民革命へ、中国革命へ。

ii) 「征服王朝」史観とその「二重統治体制」観・「(征服者の)漢化」観とへの力点を克服し、中華主義を多元主義的普遍主義に置き換えて眺めなおすこと。

Karl A. Wittfogel (1896~1988) ドイツ (フランクフルト学派) →米国 (歴史社会学、中国学)

Conquest Dynasty 「征服王朝」概念 1949年の遼史研究の中で。

遼・金・元・清 (契丹・女真・蒙古・満) の国家をそれに比定。

しかし、中国史は北方騎馬遊牧民との抜き差しならぬ関係のもとにあり続けた。

契丹の前は匈奴・突厥・鮮卑と。蒙古の後はおイラート瓦剌やタタール韃靼と。

鮮卑の北魏を中国に取り込み、五胡十六国や南北朝時代を足早に走り抜ける「中国史」は中華主義とシノロジーが合作するイデオロギー操作の所産でしかない。

Wittfogelの「征服王朝」論は、1957~69年彼のOriental Despotism「東洋的専制」論の核心として提出されたHydraulic Empire「水力〔大規模灌漑農業〕帝国」論およびBureaucratic despotism「官僚制的専制」論と密接にリンクしている。それは、ヨーロッパ中心主義的な見方で農本主義 (遊牧・牧畜・漁撈・採集的な生業を看過・軽視・没却する) にひたすら拠りかかる立場である。

Carl Schmittは言う、「人間は豊饒なる大地へ用いている努力、労働、播種、耕作は、...大地から正しく報われる。農民は、...かかる正義の内在的尺度を知る。...境界は人間の共同生活の秩序と場所を確定し、所有・相隣関係が権力・支配の形式を定める。大地

は、労働の報酬としての法を、自己自身の中に隠しもつ。…土地の分割と取得から、あらゆる所有関係の秩序が創られ、それが、あらゆる法の基礎となる。」¹⁰

接触・折衝・対立・交流・抗争・戦闘・殺戮・略奪・平和・相互扶助・文明装置貸借・取引・交換・贈与・理解・反撥・学習・敬遠・友情・恋愛・婚姻・育児・交感・感化・共飲共食・饗宴など、多様な人間・社会関係のあり方に着目することにより、単純な「漢化」という規準は相対化されなければならない。

こうして、中国における政治的変革を内外の人・物・情報の広い交流の視野の中で問題とすべきである。武装した遊牧民集団が万里長城を越えて侵入してくるという情景ばかりでなく、例えば西方から南船北馬ムスリムの自由自在な往来と定着という視角も重要なのだ。桑原隲蔵（1871～1931）の国際的によく知られた業績で研究対象とされた「宋末の提挙市舶西域人」蒲寿庚は、モンゴル側につくという彼の立場選択が南宋国家の終局を決定したとみられることから、まさしく、本稿において超克を目指している「革命」概念に関わる態度決断をした人物だったのである。¹¹

以上 a)・b) の考察から、「帝国」型編成をムワーティン革命的に脱構築するとすれば、「天下」概念の「混一」化（ウルス *ulus* [人々の渦状政治集団] 化）がひとつのヒントとなるだろう。

5] 結語

ムワーティン革命の画期性を世界史的に確かめなければならないという課題が、まさしく必然性を帯びた状況として浮上してきている現実について、その背景理解のため必要な研究のプログラム化を検討してきた。この基礎作業に取り組むことをつうじて、みずから拠って立つ立ち位置に対する自己批判・自己吟味が求められることが実感された。「革命」というカタストローフィックでさえある状況総体のつくり替え・変革・異次元転換の新しいもたらし方と新しい意味とを考える上で、刷新された「超近代」を獲得する主体こそが「問題」なのである。

日本では、国制上のドラスティックな政治的・社会的変化、それを主体的に受け止める場合の革命は、歴史的にまことに数少なく、しかもつねに言葉の綾で実態をゴマ化す緩衝装置により受身感覚へと置き換えさせる力が働いていた。大化改新、承久の乱、恐らくは天皇

殺害による明治維新、自爆戦争敗戦による無条件降伏の「終戦」と「一億総懺悔」、みな然りだった。今後は、そこからの主体変革の方向は、国の枠をどうやって乗り越えることができるか、に移らざるを得ない。

韓国は、歴史的には、政治・社会の全面的な転換は、しばしば国際的干渉と軍事的敗北ないし圧迫によることが多かった。衛氏朝鮮、高句麗、新羅、高麗、朝鮮と、そのような事態が引き継がれた。ムワーティン革命をきり拓くキャンドル革命の経験によって、歴史的条件はおおきく変化したとすることができる。もちろん、その前提となる抵抗の伝統の蓄積を忘れるわけにはいかない。

世界中、どこの社会であれ、ムワーティン革命への潜在的条件は充足しつつあると見られる。だが、それだけに、自己と世界の変革の同時追求そしてネットワークによって自由・公正・尊厳・平和・いのち尊重を目指す「革命」に対して加えられる攻撃は、ますます底無し虚偽・仮構を操作しながら、個人ファイルの管理・監視を強め、国の「枠・壁」強化と自国第一主義とへの女性の洗脳／社会動員や子どもたちの欺瞞教育／に頼ることとなっていくに違いない。しかし、「超近代」の伏流を呼び醒ます「混一」ネットワークの抵抗力が凌駕することになるのは、避けられないことである。

注

* 編集者注：本論文は『韓国宗教』（円光大宗教問題研究所）・『霊性と平和』（東アジア＜霊性＞・＜平和＞研究会）各発行者の承諾のもと、『韓国宗教』45輯（2019年2月15日刊行）に掲載された論文（韓国語）を、広く日本語読者層に提供する目的で、日本語原文を掲げるものである。

1 板垣雄三「人類が見た夜明けの虹——地域からの世界史・再論」、歴史科学者協議会編集『歴史評論』741号（2012年1月号）、校倉書房、2011年12月。

2 例示すれば、Robert Filmer (c. 1588~1653) / David Hume (1711~76) / Edmund Burke (1729~97) / Louis de Bonald (1754~1840) / Klemens Wenzel Lothar von Metternich (1773~1859) / Otto Fürst von Bismarck (1815~98) /らの諸立場。

3 2018年10月中旬以降12月7日まで随時閲覧。

4 板垣雄三「学知の建て替えに向けて—日本中東学会に托された課題」、『日本中東学会年報AJAMES』No. 30-2、2014年、pp. 99~120。

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajames/30/2/30_KJ00009783709/_pdf

5 マディーナ憲章（イブン・イスハーク [イブン・ヒシャーム編註]『預言者ムハンマド伝』第2巻、後藤明・医王秀行・高田康一・高野大輔訳、岩波書店、2011年、pp. 30~35）。

6 板垣雄三『歴史の現在と地域学——現代中東への視角』、岩波書店、1992年、pp. 3~

31。

- 7 板垣雄三「歴史を貫く^{エンゲラフ}革命と連動する世界」、『IMPACTION』、No. 152 [特集 イラン・何が誰にとって問題なのか]、インパクト出版会、2006年6月15日。
- 8 ヘロドトス『歴史』の関連箇所 *The History of Herodotus*, transl. by G.C.Macauley. http://www.gutenberg.org/files/2707/2707-h/2707-h.htm#link32H_4_0001
Vol. 1, Book III (THALEIA), pp.61~97.
プラトン 対話篇『法律』国制の部 Benjamin Jowett による英訳。
<http://classics.mit.edu/Plato/laws.mb.txt> Book III
同上 Plato, *Laws*. R. G. Bury による英語対訳、ギリシア語原文との対比ができる。
<https://ryanfb.github.io/loebolus-data/L187.pdf> pp. 222~253 (偶数頁がギリシア語)。
- 9 小島晋治・小林一美・孫江・馬場毅「中国の国家と秘密結社」[2001年3月1日の討議記録]、『椽』Vol. 13、pp. 61~84。
https://search.yahoo.co.jp/search?p=%E4%B8%AD%E5%9B%BD%E5%8F%B2+%E3%80%80%E7%A7%98%E5%AF%86%E7%B5%90%E7%A4%BE%E3%80%80%E4%BC%9A%E5%85%9A&aq=-1&oq=&ai=YfL53iRjR7.K2dtw_lCLzA&ts=49577&ei=UTF-8&fr=top_gal_sa&x=wrt
- 10 Carl Schmitt, *Der Nomos der Erde im Völkerrecht des Jus Publicum Europaeum*, Berlin:Dunker & Humblot, 1950 . [English version: *The Nomos of the Earth in the International Law of the Jus Publicum Europaeum*, transl. By G. L. Ulman, Telos Press, 2003.]
- 11 桑原隲蔵『蒲寿庚の事蹟』 宮崎市定編・解説、平凡社東洋文庫、1989年 [原著は、『宋末の提挙市舶西域人蒲寿庚の事蹟』、東亞攻究會、1923年]。